

川柳 さいたま



ススキ

平成30年(2018年)
10月号 (No.707)

日川協加盟

巻頭言

舞台劇といふこと

願法みつる

舞台劇は元来、洋の東西を問わず小劇場形式であった。だから舞台装置などは極めて単純であったと考えられる。そこは観るのではなく聴く場であった筈だ。場面や時代や刻や内心は、すべて役者達の「台詞」で示される。主役が沈黙すると、脇役がその内心を語ったりする。

シエークスピア劇のような多弁で理屈っぽい言葉群は、政治の場の弁舌合戦に似ていないだろうか。一方、言葉に大事にする東洋のそれは、繊細な台詞回しや所作で表そうとする。加えて、本音と建て前が異なる日本では、更にまた独特の世界があると言えるのだろう。

日本演劇での台詞回しは、非常に微妙であり芝居は確かに面白い。各様な詩文化の発表様式も、それなりの舞台劇のような気がする。歌会始にも、日本らしさを感じられる。

川柳はたった十七音の世界だが、一幕物の舞台劇であるとも言われる。表し得る世界が広大無辺だからだろう。となると、句会や大会での披露の場も、読みつ放しの世界ではなさそうだ。披露は、聴衆を意識するべき芝居かも知れない。今流行の一元芸の集合体に似るといふ見方もあるだろう。案外、そんな軽みの方が、現代的かも知れない。

川柳という舞台劇・なんて、理屈っぽい着想である。

日日是好

願法みつる

卑怯なり神は自身の愚を言わず

責任を問うから怖い自由主義

嘘つかぬ約束をして旅に出る

新聞の隅から隅へ吐息だけ

鰻重とパン一切れを見比べる